

## 平成 20 年度 普及に移す農業技術（第 1 回）

[分類] 普及技術

[成果名] リンゴ斑点落葉病防除にチウラムフロアブル（チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル）が有効である。

[要約] リンゴ斑点落葉病防除にチウラムフロアブルの 500 倍液を散布する。チウラムフロアブルにはチオノックフロアブルとトレノックスフロアブルがある。

[担当] 果樹試験場 病害虫土壌肥料部

[部会] 病虫部会

### 1 背景・ねらい

リンゴ斑点落葉病に対するチウラムフロアブル（チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル）の防除効果および薬害の発生の有無を検討する。

### 2 成果の内容・特徴

(1) リンゴ斑点落葉病防除にチウラムフロアブル（チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル）の 500 倍液を散布する。

#### 農薬登録内容

チウラムフロアブル（チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル）

[一般名及び成分含量] チウラム 40%

[毒性] 人畜毒性：普通物 [魚毒性] C類

[対象作物に対する適用登録状況（平成 20 年 10 月 3 日 JPP ネット確認）]

作物名	適用病害虫	希釈倍数	10a当たり 散布液量	使用時期	本剤及びチウラムを 含む農薬の総使用回数	使用方法
りんご	赤星病 褐斑病 黒星病 黒点病 すす点病 すす斑病 炭疽病 斑点落葉病 輪紋病	500倍	200～700L	収穫30日前まで	5回以内	散布

### 3 利用上の留意点

- (1) チウラムフロアブルにはチオノックフロアブルとトレノックスフロアブルがある。
- (2) 本剤は貯蔵中に分離することがあるので、使用に際しては容器をよく振ってから使用する。
- (3) 蚕毒が強いので注意する。
- (4) 魚毒性が強いので、河川、湖沼、養魚池等に飛散流入しないようにする。
- (5) 石灰硫黄合剤、ボルドー液など強アルカリ性の薬剤との混用は避ける。

### 4 対象範囲

県下全域

### 5 具体的データ

- (1) チウラムフロアブルのリンゴ斑点落葉病に対する効果を平成 14 年、19 年に検討した（表 1、2）。両年とも試験にはチオノックフロアブルを用いた。  
ア 平成 14 年は多発生条件下の試験となった。チウラムフロアブルの 500 倍液は対照のトモオキシラン水和剤と比較してほぼ同等の防除効果が認められた。葉における薬害の発生は認められなかった（表 1）。

表1 リンゴ斑点落葉病に対するチウラムフロアブルの防除効果（平成14年、果樹試験場）

供試薬剤	希釈倍数	調査葉数	発病葉率 (%)	病斑数/100葉	防除価 <sup>1)</sup>	葉害 (葉)
チウラムフロアブル (チオノックフロアブル)	500	207.0	9.8	14.7	82.1	なし
トモオキシラン水和剤	500	199.5	13.9	19.9	74.6	なし
無 散 布	—	193.0	54.8	99.7		

1) 発病葉率より算出 防除価=100－(散布区の発病葉率/無散布区の発病葉率)×100

試験場所：果樹試験場内ほ場

供試品種：「スターキング・デリシャス」(約24年生、強せん定樹)

試験規模：1区2～3樹、2反復

薬剤散布：平成14年5月28日、6月10日、6月24日、7月9日の計4回、動力噴霧器で十分量を散布した。

調 査：試験開始時に最上位の展開葉にマーキングして、以降に展葉した葉を調査対象とした。平成14年7月18日に1区当たり16新梢の展開葉全葉について、発病の有無および病斑数を調査した。葉害の発生の有無については随時調査した。

イ 平成19年は少発生条件下の試験となった。チウラムフロアブルの500倍液は対照のキノンドー水和剤80と比較してほぼ同等の防除効果が認められた。葉における葉害の発生は認められなかった(表2)。

表2 リンゴ斑点落葉病に対するチウラムフロアブルの防除効果（平成19年、果樹試験場）

供試薬剤	希釈倍数	調査葉数	発病葉率 (%)	病斑数/100葉	防除価 <sup>1)</sup>	葉害 (葉)
チウラムフロアブル (チオノックフロアブル)	500	443.0	2.2	2.4	80.2	なし
キノンドー水和剤80	1,200	468.0	1.6	1.6	85.6	なし
無 散 布	—	379.5	11.1	18.3		

1) 表1と同じ

試験場所：果樹試験場内ほ場

供試品種：「スターキング・デリシャス」(約29年生、強せん定樹)

試験規模：1区2～3樹、2反復

薬剤散布：平成19年7月3日、7月16日、7月31日、8月15日の計4回、動力噴霧器で十分量を散布した。

調 査：試験開始時に最上位の展開葉にマーキングして、以降に展開した葉を調査対象とした。平成19年8月27日に1区当たり約20新梢の調査対象葉について、発病の有無および病斑数を調査した。葉害の発生の有無については随時調査した。

## 6 特記事項

[公開] 制限なし

[課題名、研究期間、予算区分]

果樹の病害虫防除農薬の効果試験、平成14、19年(2002、2007年)、民間受託